令和５年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2024

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

1．本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立って実施した試掘・確認調査・立ち会い調査の報告である。これらについては令和５年度国庫・県費補助金の交付を受けた。

2．調査主体は長岡市教育委員会科学博物館である。

3．本文の執筆は、加藤（２～４）、山賀（６）、丸山（１・５・７）で分担し、編集は丸山が行った。

4．遺物番号は遺跡ごとの通し番号である。

5．出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は長岡市教育委員会が保管している。

6．現地調査から本書の作成に至るまで多くの方から御協力、御教示を賜った。記して御礼を申し上げる（五十音順・敬称略）。

株式会社エヌ・アール・ケー総合企画　　株式会社ステーツ　　株式会社マリモ

国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所

目　　次

1	令和５年度長岡市内遺跡発掘調査の概要	1
2	大河津分水路地区試掘調査	3
3	与板地区試掘調査	7
4	立ノ入地区試掘調査	8
5	長岡城跡（城内町３丁目）確認調査	9
6	転堂遺跡確認調査	10
7	摂田屋館跡確認調査	14

第１図　長岡市の位置

写真１　調査風景（転堂遺跡）

１　令和５年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

（１）長岡市の地勢

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置しており、面積は 891ｋ㎡におよぶ。市の中央部を日本一の長さと流水量を誇る信濃川が縦断し、その両岸に肥沃な沖積平野が広がっている。平野の東西には、東山丘陵と西山丘陵と称される東頸城丘陵がそれぞれ連なっている。東山丘陵の東、栃尾地域の南東方面には、越後山脈に属する標高 1,537ｍの守門岳がそびえる一方、市域の北側の寺泊地域では日本海に面して約 16 ㎞の南北に延びる海岸線を持つ。このように長岡市の地形は、山岳地帯から丘陵・平野・海岸部に至り、非常に変化に富んでいる点に特徴がある。その地勢的な要因から、それぞれの地域によって特色ある歴史、文化が育まれてきている。

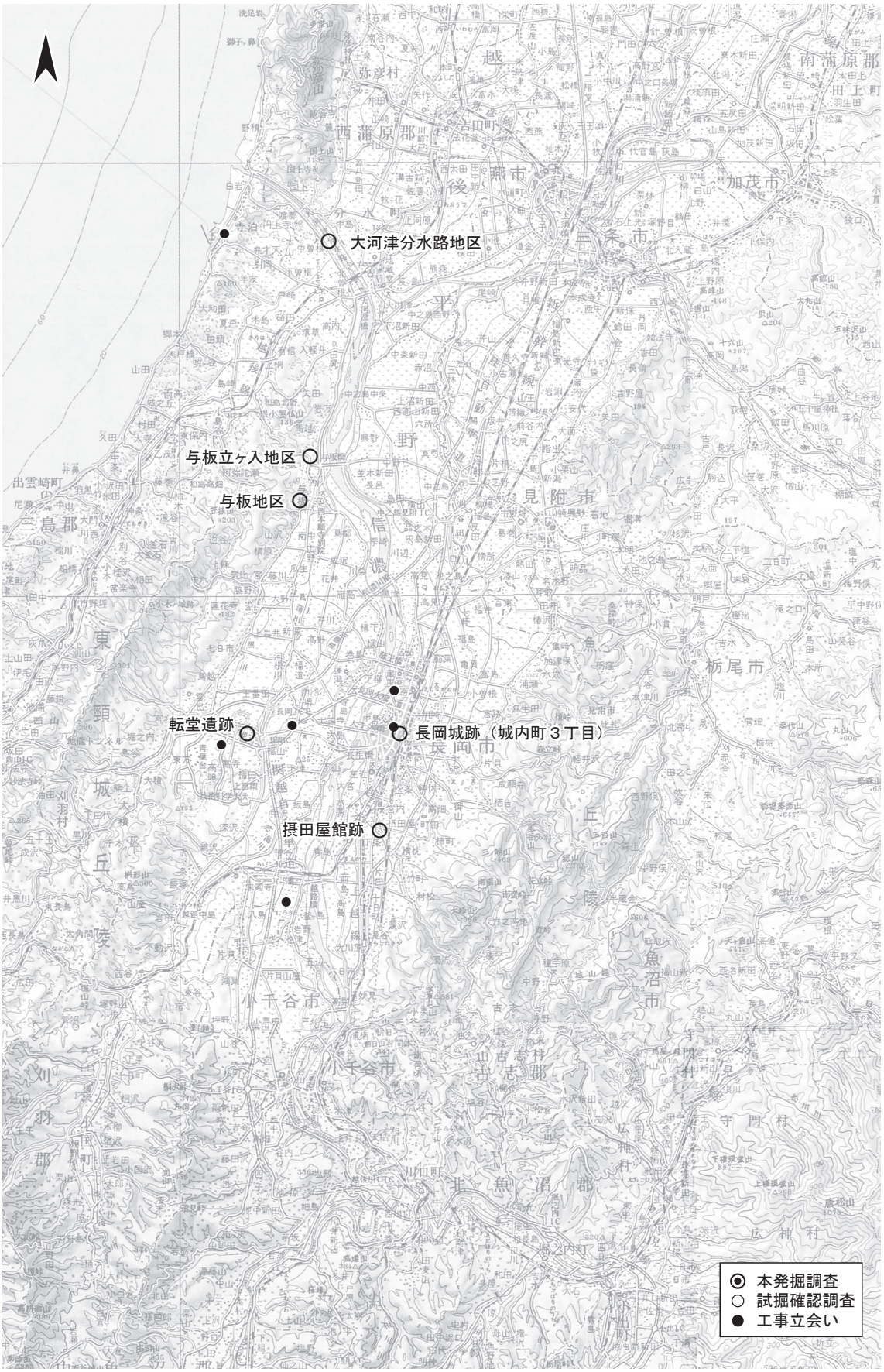
（２）調査の概要

令和５年度は、試掘・確認調査を６件実施した。このほか、諸開発に伴う立会調査を７件実施した（第１表）。本発掘調査は令和４年度に２件実施したが今年度は実施なしであった。全体の調査件数は長岡地域が最多の８件で、そのうち住宅関連が５件と過半数を占めた。これは長岡駅周辺の再開発事業や新型コロナウイルス感染症の５類移行に伴う経済活動の再開が影響しているものと推測され、今後もこの傾向は続くと考えられる。

次に主要な調査成果について概観したい。信濃川大河津分水路改修事業に係る試掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器及びピットが検出された。今後は新遺跡として登録し、その取扱いについて事業者と協議を行う予定である。また、転堂遺跡では宅地造成に伴う確認調査を実施した。縄文時代中期中葉を中心とする土器や土坑、焼土等が検出され、遺跡が残存することが判明したため、掘削を伴う開発部分については本発掘調査が必要となる。

第１表　令和５年度長岡市内遺跡調査一覧（本書掲載の調査はゴシック体で示した）

地域	地区	調査原因	結果など
寺泊	聚感園	史跡説明板設置	立会　遺構・遺物なし
	大河津分水路地区	**大河津分水路改修事業**	**試掘　ピット／土師器**
与板	**与板地区**	**庁舎建設事業**	**試掘　遺構・遺物なし**
	与板立ヶ入地区	**水道施設建設工事**	**試掘　遺構・遺物なし**
長岡	**摂田屋館跡**	**住宅建設工事**	**確認　遺構・遺物なし**
	転堂遺跡	**宅地造成**	**確認　土坑／縄文土器**
	長岡城跡（城内町三丁目）	**集合住宅建設工事**	**確認　遺構・遺物なし**
	長岡城跡（呉服町一丁目）	建物解体工事	立会　遺構・遺物なし
	長岡城跡（台町二丁目）	建物解体工事	立会　遺構・遺物なし
	蔵王堂城跡	雨水排水路整備等	立会　遺構・遺物なし
	長岡浦田	用水路補修	立会　遺構・遺物なし
	馬高	電柱設置	立会　遺構・遺物なし
越路	多賀屋敷	建物建設工事	立会　遺構・遺物なし



第２図　令和５年度調査位置図（1/250,000）

２　大河津分水路地区試掘調査

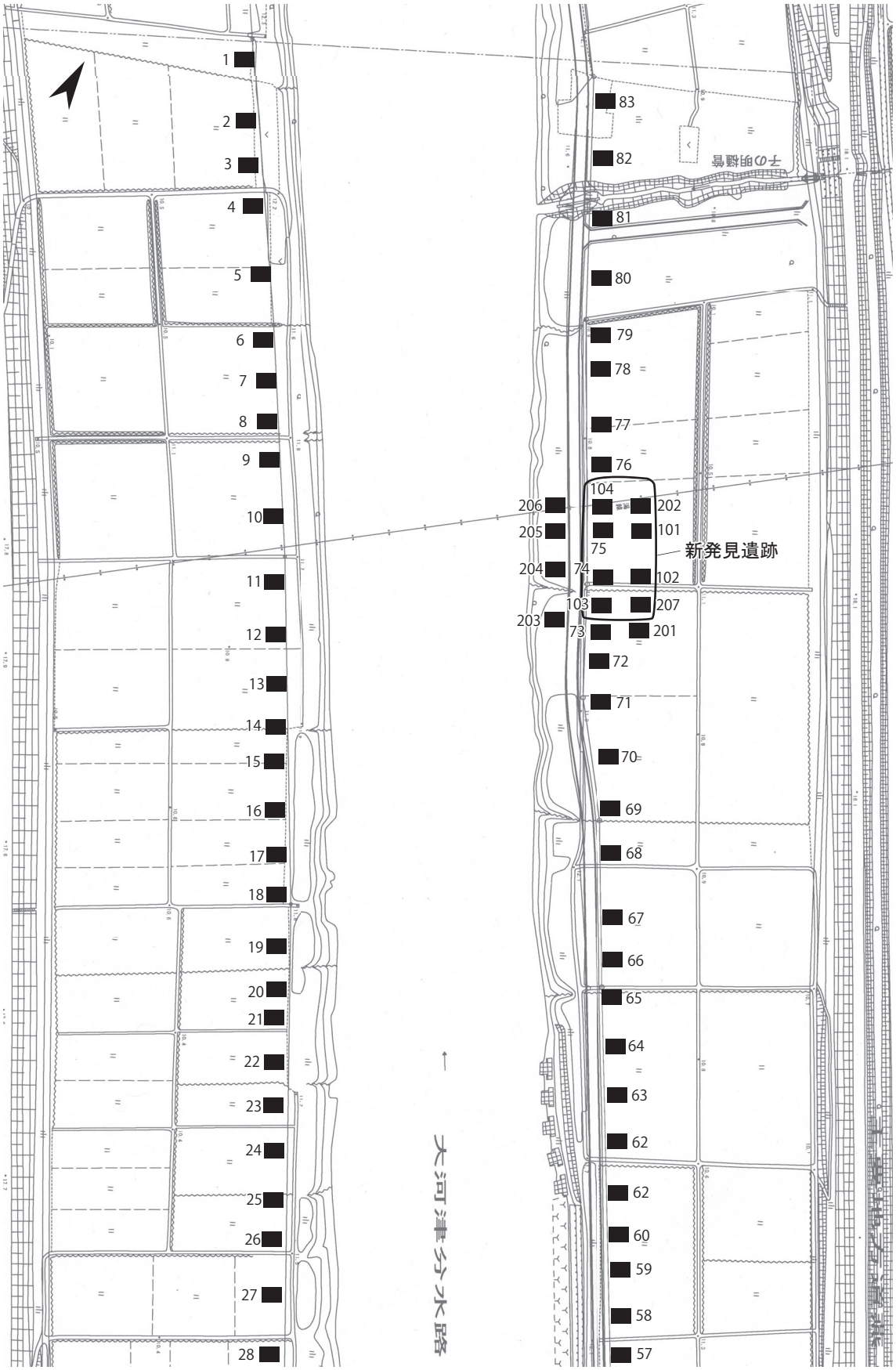
調 査 地	大河津分水路河川敷（長岡市寺泊蛇塚地内）	調査面積	262.2 ㎡（対象面積 145,000 ㎡）
調査期間	令和５年９月５日～12 月 11 日	調査担当	加藤由美子・小林　徳

調査に至る経緯　令和５年３月、国土交通省北陸地方建設局信濃川河川事務所計画課（以下、河川事務所）から長岡市教育委員会（以下、市教委）に、信濃川大河津分水路改修事業（低水路掘削）地内における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。事業地内に周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないが、明治以降の分水路工事の際に中世土器や古墳時代遺物が出土したことが知られており、これまでも河川敷内で五千石遺跡（長岡市№1250・燕市№125）、石港遺跡（燕市№53）が発見されている。市教委は同地域周辺には周知の遺跡が複数存在し、未周知の遺跡の存在も考えられるため、開発に際して事業着手前に埋蔵文化財の試掘調査が必要である旨を河川事務所に回答した。令和５年７月、河川事務所は市教委に試掘調査を依頼した。これに対し市教委は、対象面積が広大であることから複数年で調査を行う計画を立て、河川事務所もこれに同意、調査１年目の令和５年度は寺泊蛇塚地内で調査を実施した。

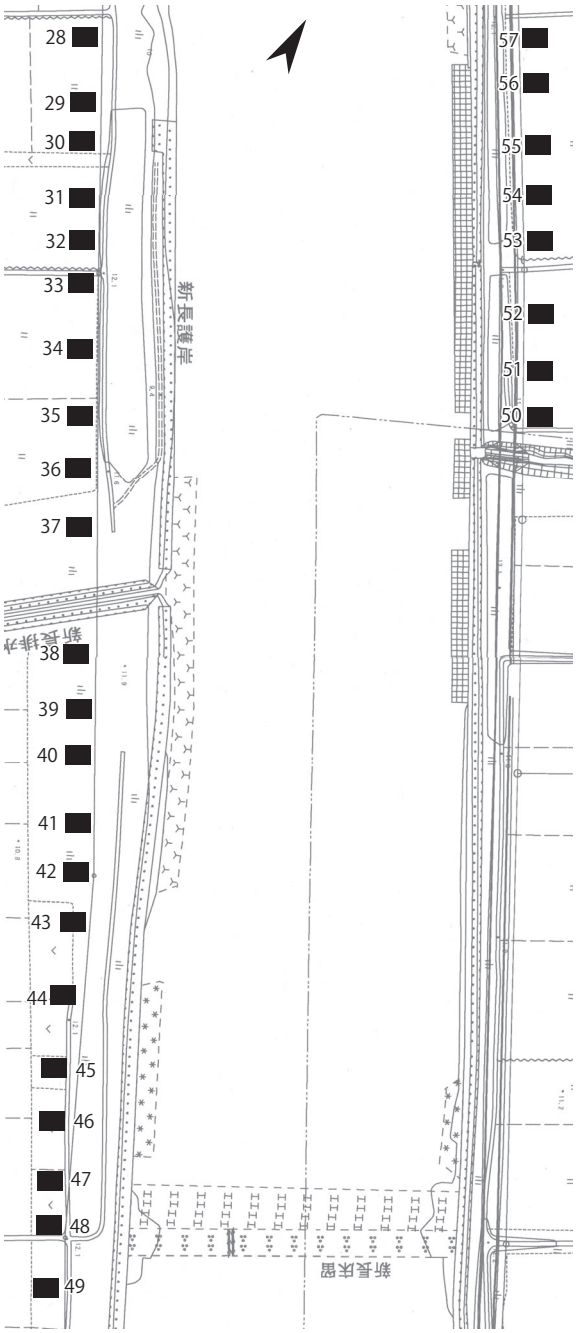
調査地の概要　調査地の現況は大河津分水路の河川敷で、専有許可を得た耕作者が一部水田耕作を行っているが大半は荒蕪地である。下流側 1.5㎞には古墳時代の石港遺跡、上流側 2.2 ㎞には同じく古墳時代の五千石遺跡が存在する（第３図）。現地は分水通水後の洪水砂が厚く堆積し、分水路開削以前の旧地形をうかがい知ることはできない

写真２　調査地全景

第３図　調査位置図（1/70,000）

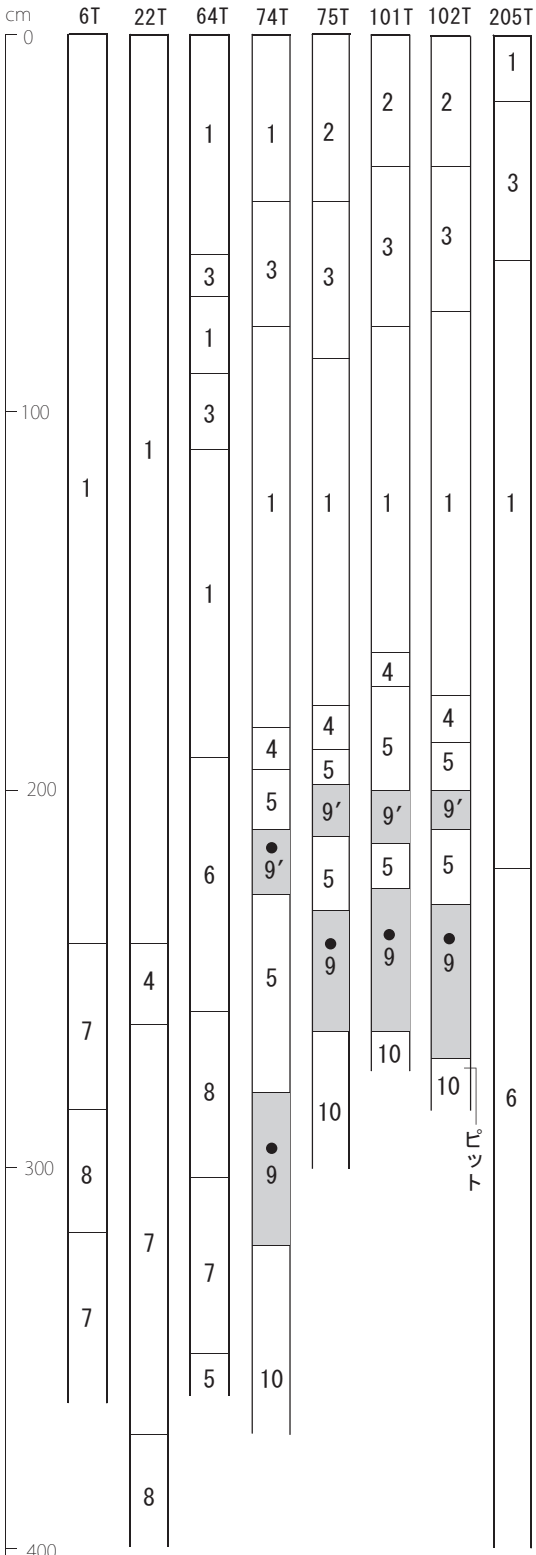


第４図　トレンチ配置図①（１/5,000）



第５図　トレンチ配置図②（１/5,000）

写真３　調査風景



1 洪水堆積砂
2 客土
3 旧表土
4 暗灰～黄灰シルト・細砂
5 暗灰～黄褐粘質土
6 暗灰～青灰シルト・砂質土
7 暗褐～暗灰ガツボ混じり粘土・粘質土
8 茶褐～黒褐ガツボ
9 黒褐粘質土（遺物包含層）
10 黄灰～灰白粘質土（遺構確認面）

第６図　土層柱状図（1/20）

調査の結果　調査対象地内に 4.6m×4.6mの試掘トレンチを計 95 か所設定し調査を行った。結果、一つの新遺跡を発見した（第４～６図）。基本層序は、分水路通水以降の洪水に伴う砂層（１層）が厚く堆積し、その最下層に湧水を伴うシルト・細砂層（４層）がある。調査では５層以下を江戸時代以前の堆積層ととらえている。５～８層はしばしば互層となる。鍵となるのは８層のガツボ層でおよそ９割以上のトレンチでガツボ層を検出した。ガツボ層の存在はかつてこの一帯が低湿地であったことを物語っている。一方、新しく遺跡が発見された 74・75・101・102・104・207Ｔ周辺ではガツボ層は検出されなかった。代わりに弥生時代後期から古墳時代前期にかけての包含層である９層の黒褐色粘質土が存在し、その下位に遺構確認面の 10 層の粘土層がある。なお、９層は上下２層あるが、遺物が含まれるのは下層である。新遺跡とした範囲は、周辺に比べてやや微高地となる可能性が高い。

遺構は 102・104・207Ｔの 10 層上面で４基のピットを検出した。今回は確認面が深かったため調査の精度に限界があった。このことを考慮すれば、仮に本発掘調査を行った場合、試掘調査では確認できなかった溝や土坑、住居址など一定量の遺構が検出される可能性が十分にある。遺物は 74・75・101・102Ｔから、弥生時代後期前半（法仏期）から古墳時代前期にかけての土器が出土した（写真７・8）。赤彩を伴う土師器が定量含まれる。土器の割れ口は全く摩耗しておらず、当時の生活空間がすぐ近くにあり、そこからの廃棄と考えられる。今後はこれら遺構・遺物を検出した広がりをひとつのまとまりとしてとらえ、新遺跡として登録する予定である。新しく発見された遺跡の範囲については、改めてその取扱いについて市教委と協議を行う必要がある旨を河川事務所に伝えた。

写真４　74 トレンチ

写真５　75 トレンチ

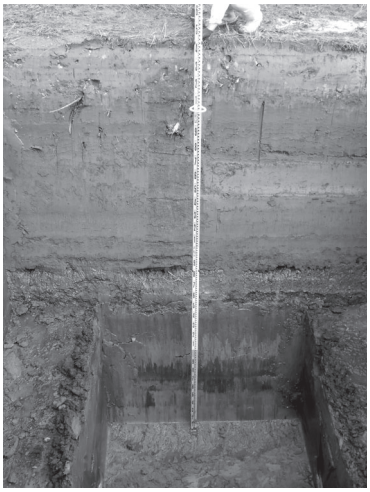


写真６　102 トレンチ

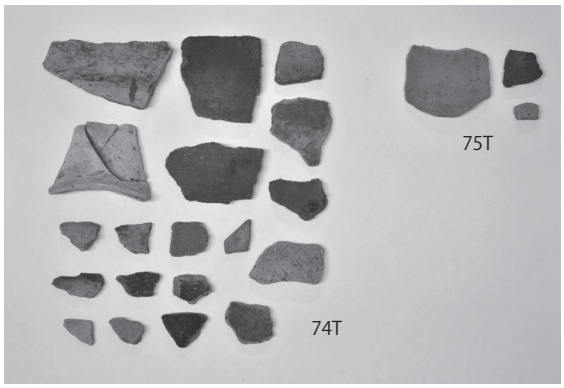


写真７　出土遺物（１）

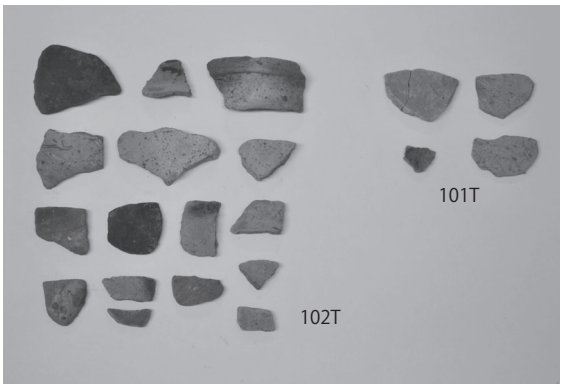


写真８　出土遺物（２）

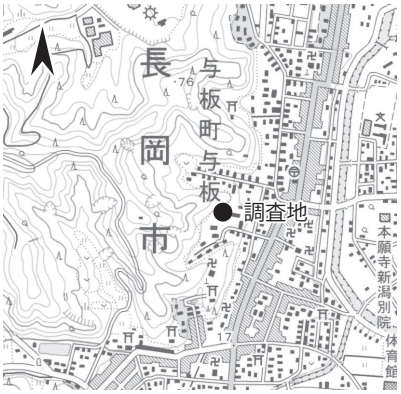
３　与板地区（与板地域交流拠点施設建設予定地）試掘調査

調 査 地	長岡市与板町与板甲 134	調査面積	7.5 ㎡（対象面積 1,400 ㎡）
調査期間	令和５年 10 月２日	調査担当	加藤　由美子

調査に至る経緯　令和４年５月、長岡市教育委員会は、長岡市都市整備部都市施設整備課（以下、事業課）と長岡市与板地域交流拠点施設建設事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。事業地には周知の遺跡は存在しないが近世において与板藩の陣屋が置かれていたことが文献資料から知られる。これまで周辺で埋蔵文化財調査が行われたことがなく未発見の遺跡が存在する可能性もあることから、開発に先立ち試掘調査を実施し、遺跡の有無を確認することとした。

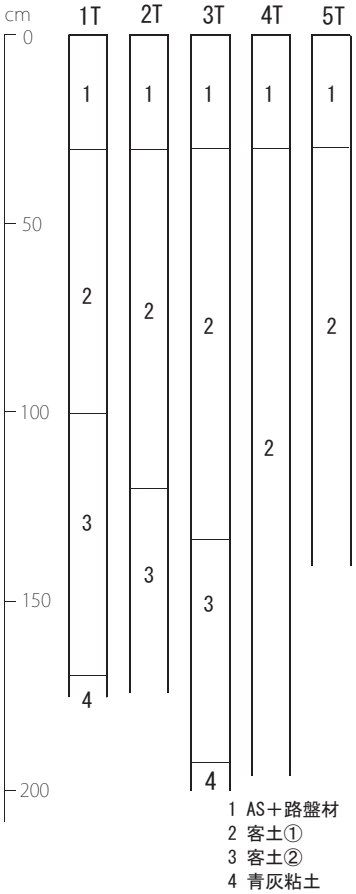
調査地の概要　信濃川左岸の西山丘陵裾部に位置し、標高 20m 前後。現況は長岡市与板支所の駐車場である（第７図）。調査では交流拠点施設建設範囲に１ｍ×1.5ｍの試掘トレンチを５か所設定した（第８図）。

調査の結果　近代の土地利用に伴う客土が確認された（第９図）。旧来の谷地形を客土により成形したものと考えらえる。遺構・遺物は検出されなかった。よって事業地内には遺跡は存在しないと判断し、事業課にその旨を伝えた。



第７図　調査位置図（1/25,000）

第８図　トレンチ配置図（1/2,500）



第９図　土層柱状図（1/20）

写真９　調査地全景

写真 10　２トレンチ

４　与板立ヶ入地区試掘調査

調 査 地	長岡市与板町与板字立ヶ入地内	調査面積	３㎡（対象面積 1,151 ㎡）
調査期間	令和５年 10 月 25 日	調査担当	加藤　由美子

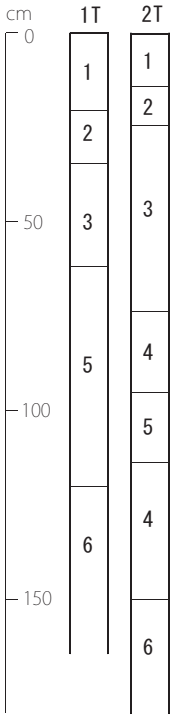
調査に至る経緯　令和４年８月、長岡市教育委員会は、長岡市水道局浄水課（以下、事業課）と与板ポンプ場建設に係る埋蔵文化財の取扱いについての協議を行った。事業地には周知の遺跡は存在しないが、周辺で埋蔵文化財調査が行われたことがなく未発見の遺跡が存在する可能性があるため、開発に先立ち試掘調査を実施し遺跡の有無を確認することとした。

調査地の概要　調査地は信濃川左岸の西山丘陵裾部の谷部の開口部に位置する。標高 15.5m、現況は水田である（第10図）。今回は事業地のうちポンプ場の建設が予定される範囲に１ｍ×1.5ｍの試掘トレンチを２か所設定した。調査地は主にしまりののある粘質土が堆積した安定した地盤である（第11図）。

調査の結果　遺構・遺物ともに検出されなかった。よって事業地内に遺跡は存在しないと判断し、事業課にその旨を伝えた。

写真 11　調査地全景

第 10 図　調査位置図（1/25,000）



第 11 図　トレンチ配置図（1/2,500）及び土層柱状図（1/20）

写真 12　１トレンチ

写真 13　２トレンチ

５　長岡城跡（城内町３丁目）確認調査

調 査 地	長岡市城内町３丁目	調査面積	54 ㎡（対象面積2,085㎡）
調査期間	令和５年 12 月 20 日・21 日	調査担当	丸山一昭

調査に至る経緯　令和５年９月、周知の埋蔵文化財包蔵地（長岡城跡）の範囲内にある対象地において、集合住宅建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。長岡市教育委員会は事業者の株式会社マリモと協議を行い、令和５年度に遺跡の残存状況を確認するための発掘調査を実施することとなった。

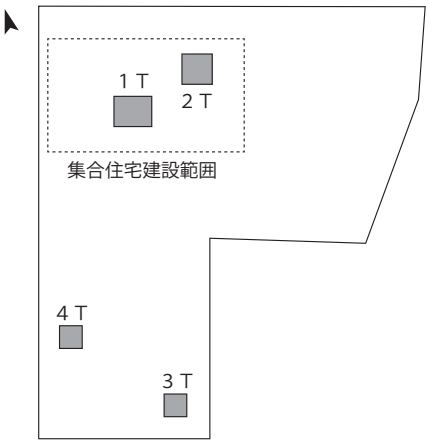
調査地の概要　長岡城は 17 世紀初頭から城郭と城下町が築かれ、その後 250 年にわたり長岡藩政の中心地として栄えた。その後、慶応４年（1868）の北越戊辰戦争により焼失し、明治以降商工業の中心地として市街地化が進み、土塁や堀は姿を消した。さらに、第二次世界大戦時の空襲から復興とともに都市の近代化が進められ、現在に至っている。調査地は三ノ丸から北方へ続く外堀の境界付近と推測され、以前は倉庫が建設されていた（第 12 図）。

調査の結果　調査トレンチを敷地内に４か所設定した（第 13・14 図）。集合住宅部分の１Ｔでは、地表下 1.1 ｍほどで自然堆積の土層を確認した。しかし、遺構・遺物は確認されず、2.3ｍ掘削した時点で地山（青灰色シルト層）となった。また、２Ｔでは地表下２ｍほどまで砕石混じりの盛土があり、その後は１Ｔと同様に地山が検出され、遺構・遺物は確認されなかった。また、屋根付き駐車場部分の３Ｔ・４Ｔでは２ｍほどの攪乱層が認められ、こちらも遺構・遺物は確認されなかった。

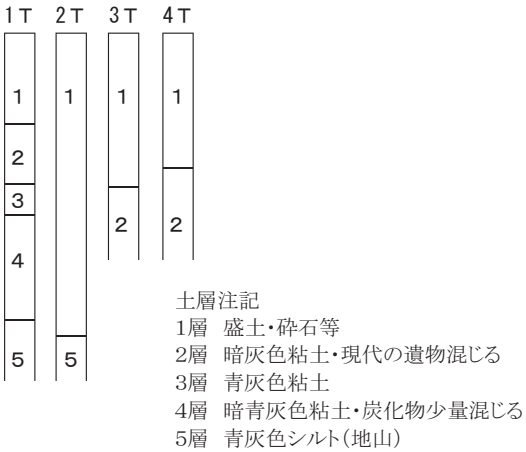
このことから、今回計画の工事実施について特に支障はないと考えられる。

第 12 図　調査位置図（10,000）

写真 14　１Ｔ完掘状況（東から）



第 13 図　トレンチ配置図（1/1,000）



第 14 図　土層柱状図（1/50）

６　転堂遺跡確認調査

調 査 地	長岡市上除町甲 1961 番地ほか	調査面積	48.7 ㎡（対象面積 720 ㎡）
調査期間	令和５年 10 月 17 日～10 月 18 日	調査担当	山賀和也

調査に至る経緯　令和５年９月 25 日、株式会社エヌ・アール・ケー総合企画（以下、事業者）から宅地造成に係る埋蔵文化財の取扱いについて照会があり、協議を行った。事業地は、転堂遺跡の範囲内に位置するため、事業着手前に遺跡の状況を確認する必要があることを伝えた。遺跡の状況によって事業の計画が大きく変わることから、早急に確認調査を行うことで合意した。

第 15 図　遺跡位置図（1/10,000）

調査地の概要　調査地は、信濃川左岸の河岸段丘上に位置する。標高は約 50m、現況は畑地である。南から北に向かって緩やかに傾斜する地形となっている。転堂遺跡は縄文時代中期の遺跡で、周辺には同時期の南原遺跡や馬高遺跡が点在する。遺跡の存在は古くから知られており、火焔土器の発見で有名な近藤家も頻繁に踏査を行うなど、多量の縄文土器および石器が採集されてきた。令和４年度には道路拡幅工事に伴う本発掘調査が実施されており、竪穴住居跡３棟が確認されている。また、倒立した火焔型土器が出土し注目された。

調査の結果　調査地が畑地であることから、遺跡の残存状況を把握することを目的として調査を実施した。調査では、事業計画地に 11 カ所トレンチを任意で設定し、バックホウと人力で丁寧に掘削した。土の堆積は耕作土（１層）の下に遺物包含層とみられる暗褐色土（２層）が堆積しており、黄褐色土（４層）が遺構確認面である。調査前は、後世の耕作により遺物包含層（２層）が削平されていると思われたが、北側に設置された２・３・11Ｔは比較的良好に残っていた。また、黄褐色土層（４層）は削平されていないため、遺構は良好に残っているものと考えられる。遺構は、１・２・３・５・10・11Ｔの６カ所のトレンチで確認した。ほとんどが土坑であったが、２Ｔで焼土を伴う遺構が検出されている。遺物は、１・２・３・11Ｔから出土しており、そのうち２・３Ｔからは多量の遺物が出土している。

出土遺物　２・３Ｔから主要な出土遺物 25 点を掲載した（第 19 図）。１～10 は２Ｔから、11～25 は３Ｔからの出土である。１は、北陸系の土器で千石原式に位置付けられる。４段目の隆線への加飾は、半截竹管工具によるものではなく、ヘラ状工具によって連続刺突されている。このヘラ状工具による施文は、器面に対しておよそ直角に刺突されている。２は、波状口縁の土器で口縁部の下に縄の側面圧痕を施し、その上位を無文帯、下位に縄文を施す。大木７ｂ式に比定されよう。３は、半截竹管工具の外皮側を上にして、工具を器面に対して斜位（約 20°）で刺突され、下から右上へ施文される。これは、千石原式土器等に見られる爪形文と同じ原体の動きと考えられる。大木７ｂ式期に位置付けられよう。４は、栃倉式に伴う大木系の大型深鉢と考えられる。５は、波状口縁の土器で、口縁部直下には２本一組の沈線で施文する。

さらにその下には円環状の添付文が配され、その周りに沈線を沿わせている。中期中葉に位置付けておきたい。６は、器面が隆線で埋め尽くされる土器で、隆線の一部に刻み目を加えている。また、橋状の把手が付くものと推定される。時期は、調査資料を含め類例が見当たらないが、広く中期中葉に位置付けておきたい。７は、胴部片で縦位に半隆起線を引き、その間に縄文を施文する。おそらく中期中葉に位置付けられる。８は、無文土器で緩やかな波状口縁を持つ。波頂部から逆Ｃ字の隆帯が垂下する。中期末葉に位置付けられよう。９は、ｒ縄文が施文される。10 は、大木系の土器で縄文地文に並行沈線による波状文を施す。11 は、千石原式の口縁部破片である。12 は、口縁部を屈曲させ狭い文様帯を設ける土器で、主に棒状工具による沈線文で文様が描かれている。器形及び施文手法から五丁歩式に位置付けたい。13 は、「五丁歩系土器」（長澤 2018）の突起部分であろう。口唇端に沈線が加えられている。14 は、北陸系の土器で半隆起線文によって文様を描いている。「羽黒類型」（松島 2019）に含まれる土器であろう。15 は、平口縁で口縁部から頸部の土器である。およそ無文土器であるが、口縁部には隆帯が添付されていたものと思われる。一見すると波状口縁の土器に見えるが、裏面から観察すると肥厚させた口唇部に棒状工具による沈線を加えていることがわかる。したがって、波状部に見える箇所は突起であろう。あるいは、鶏冠状把手の類になる可能性がある。器形などから馬高式期に位置付けたい。なお、胎土に黒灰色混和材が混入している。16 は、おそらく鶏冠状把手の一部。胎土が似ているため 15 と同一個体の可能性がある。17 は、隆線で文様を描き、斜位の沈線文を充填している。栃倉式の新しい段階に位置付けられよう。18 は、密接する沈線が施される土器。栃倉式の新しい段階に位置付けておきたい。19 は、縄文施文の土器。口縁部が緩く外反する土器で無文帯になる。おそらく大木８ｂ式並行に位置付けられる。20 は、波状口縁の土器で、口唇部を肥厚させその直下に隆帯を１条添付する。その下には縄文が施文されている。21 は、胴部が球形状に張る形態の土器の括れ部片である。隆帯を連繋させて文様を描き、粗い縄文を充填する。隆帯の脇は、棒状工具による沈線を沿わせている。おそらく、大木９式並行の土器であろう。22 は、口縁部に無文帯を設け、その下に２条の刺突列を施す。中期末葉に位置付けておきたい。23 は、胴部片で0縄文を地文とし、そこに細い縦位の沈線を加えている。24 は、底部資料。縄文施文の土器で、底面には圧痕らしきものも確認できる。25 は、磨製石斧の基部片である。

まとめ　調査の結果から、事業計画地の東側半分程度の範囲に遺跡が残存していることが確認できた。そのため、掘削を伴う開発部分について本発掘調査が必要である。出土した遺物を見てみると大木７ｂ式～８ｂ式期の土器が主体であり、これまでの調査結果に沿うものであった。しかし、わずかではあるが中期末葉の土器が出土しており新たな成果を追加できた。

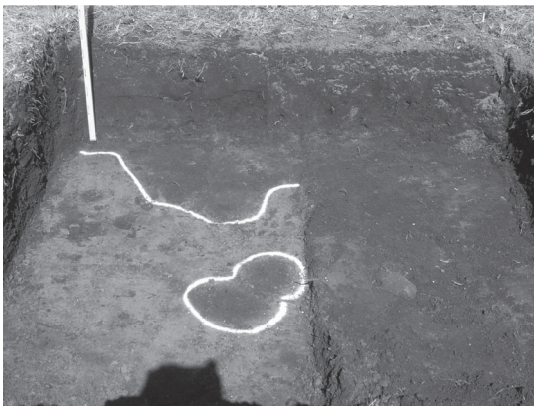
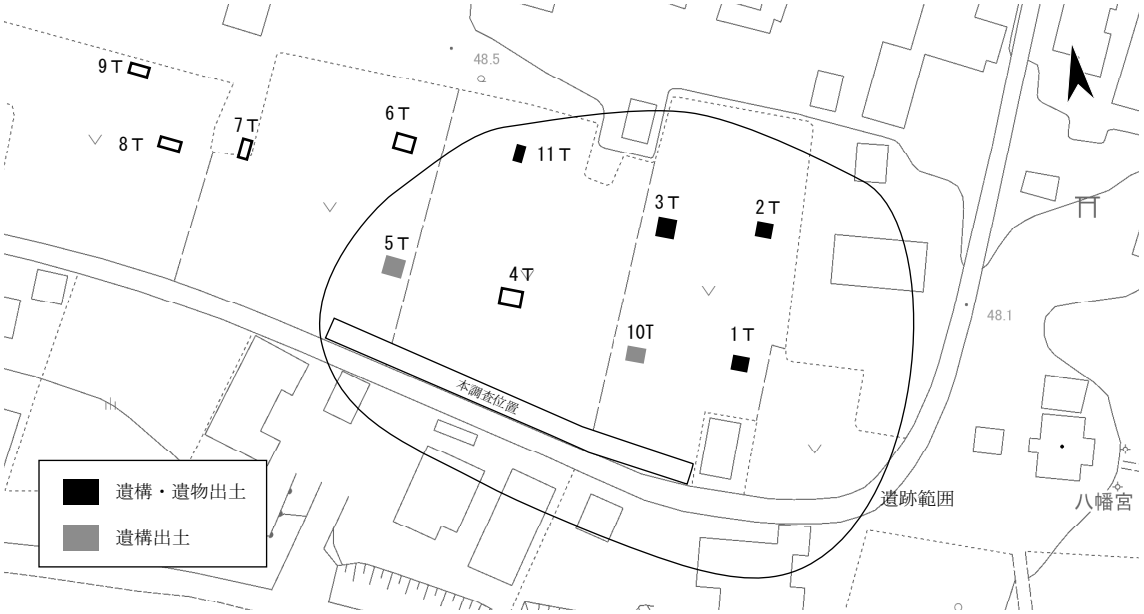
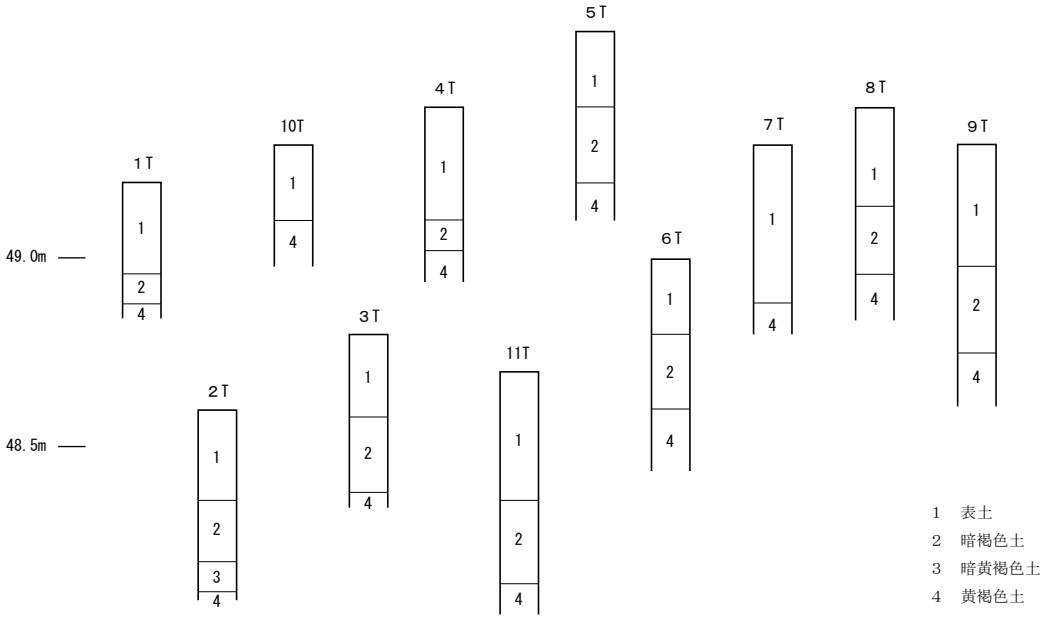


写真15　２Ｔ完掘状況

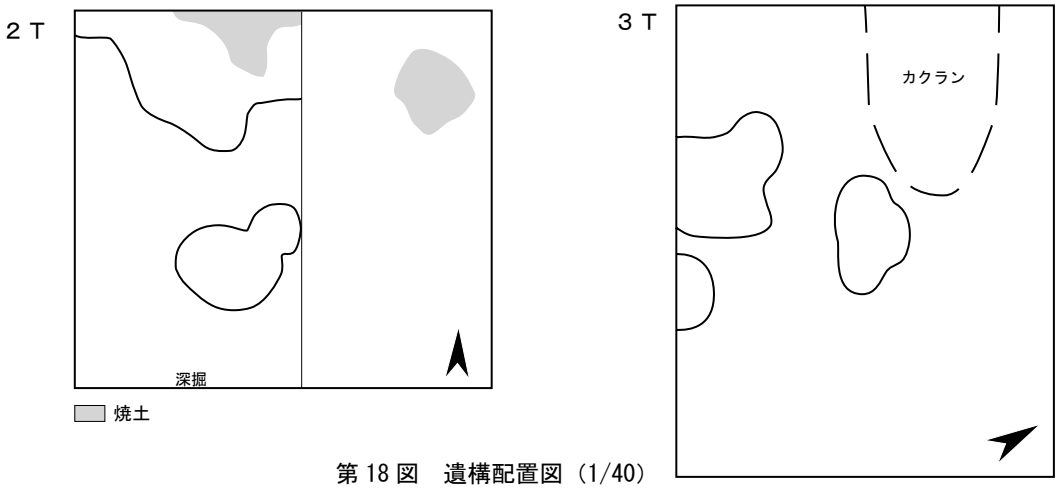
写真16　３Ｔ完掘状況



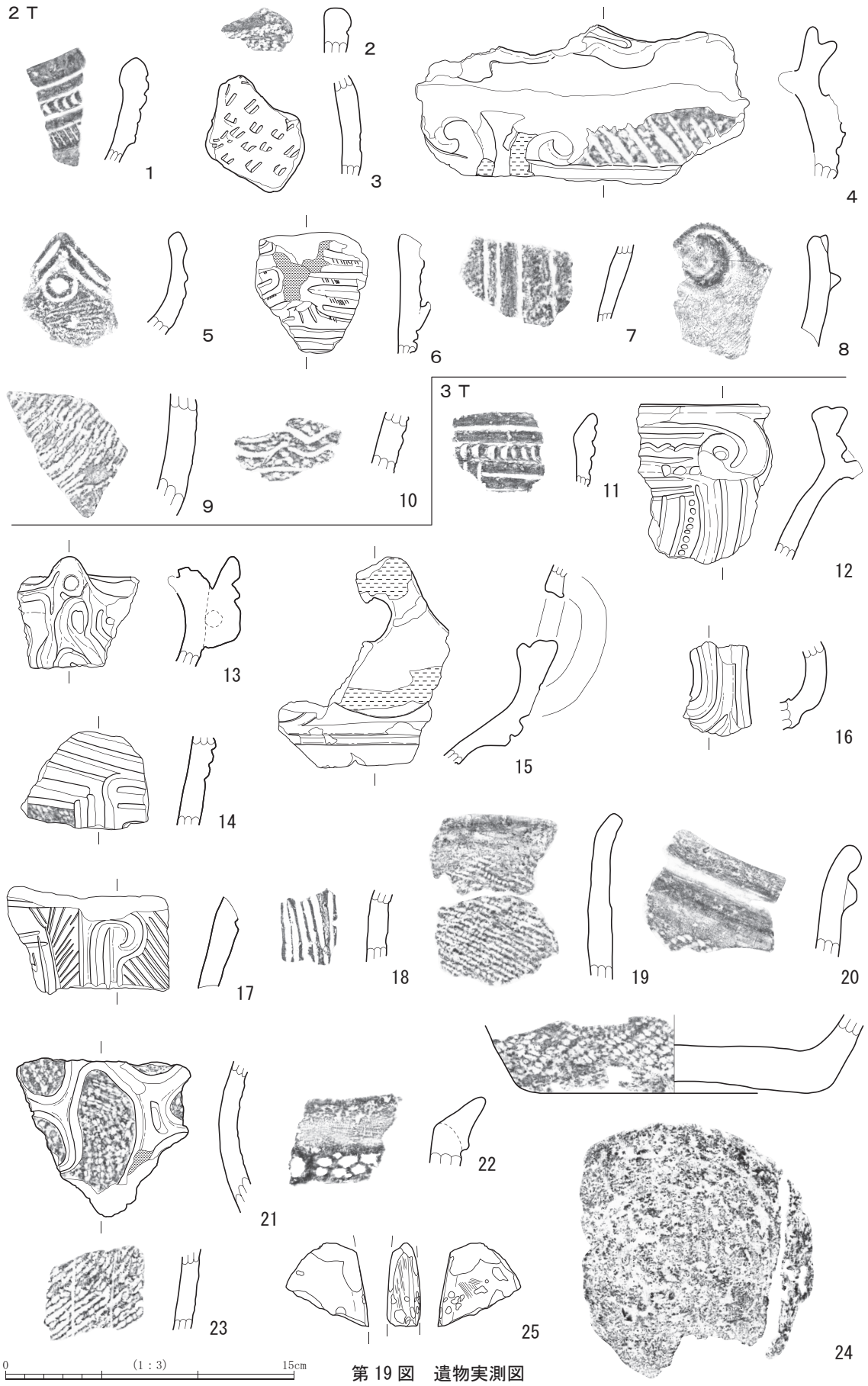
第 16 図　トレンチ配置図（1/1,000）



第 17 図　土層柱状図（1/40）



第 18 図　遺構配置図（1/40）


2 T
3 T
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
0
(1 : 3)
15cm

第 19 図　遺物実測図

7　摂田屋館跡確認調査

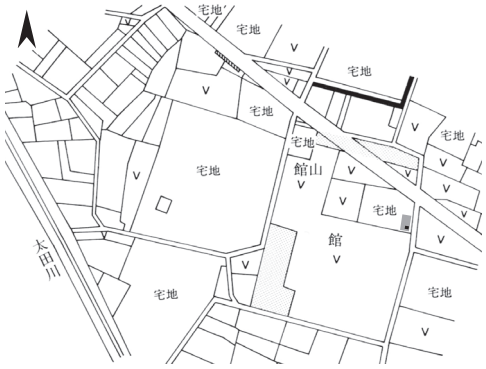
調 査 地	長岡市摂田屋二丁目	調査面積	6㎡（対象面積 137.4 ㎡）
調査期間	令和５年６月 12 日	調査担当	丸山一昭

調査に至る経緯　令和５年４月に周知の埋蔵文化財包蔵地である摂田屋館跡において、個人住宅建築計画に係る埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。対象地はすでに俗称「館」とよばれ館内部に位置することから、遺跡の残存することが想定されたため、令和５年６月に確認調査を実施することとなった。

調査地の概要　調査地は、太田川右岸の自然堤防上に位置し、現況は宅地や畑となっている。館跡は『恩古の栞』一四篇に「川上氏の邸地にして」「本丸方三、四十間余、外郭、塘堀の跡幽に存す」とありその痕跡が残されていたが、昭和 59 年の遺跡カード作成段階においては土地改良・宅地化により堀の一部は消滅していた。また、明治 20 年の地籍図によれば館跡は 80×60ｍのやや縦長の地割となっており、北側には幅約７ｍの帯状の水田が認められ堀跡と推定される。さらに西側にもＬ字形の水田が見られることから、かつては館の周囲に堀がめぐっていたと推定される。また、西側に隣接する 55ｍ四方の宅地とされる地割は外郭跡と推定されている。今回の調査地は館の地籍図上では東辺に位置する地点にあたるが、地元の話によればかつて住宅があったとのことであった（第 21 図）。

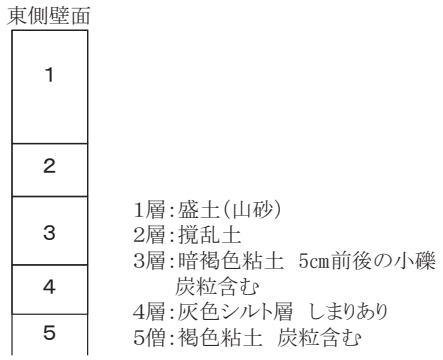
調査の結果　調査トレンチはかつて住宅があった北側を避けて、南端部に２×３ｍほどのトレンチを１か所設定し、バックホウと人力で地表下 85 ㎝ほどまで慎重に掘削を行った（第 20・21 図）。土層は盛土（１層）、攪乱土（２層）までが 45 ㎝ほどあり、３層以下は炭粒を含む堆積土で何らかの活動が想定されるが、館の存在を示す柱穴や掘などの遺構や遺物は確認されなかった。このことから、埋蔵文化財への影響はなく工事の実施には支障がないことを事業者に伝えた。

第 20 図　調査位置図（1/2,000）



第 21 図　摂田屋館跡の地籍図（明治20年）

写真 17　完掘状況（西から）



第 22 図　土層柱状図（1/20）

引用・参考文献

阿部　泰之

2011　「遺物　屋敷島遺跡出土の様相」『阿賀町埋蔵文化財調査報告書第２集　屋敷島遺跡発掘調査報告書Ⅱ　遺物編』　阿賀町教育委員会

長岡市

1992『長岡市史』資料編１　考古

長岡市教育委員会

2022　『令和３年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』　長岡市教育委員会

2023　『転堂遺跡』　長岡市教育委員会

長澤　展生

2018　「火焔型・王冠型土器出現前夜の様相―五丁歩式土器設定の試み―」　津南町教育委員会編『津南学叢書第 35 輯　馬高式土器の成立・展開・終焉　予稿集』　津南町教育委員会

松島　悦子

2019　「縄文土器について」『燕市埋蔵文化財調査報告書第８集　宝崎遺跡　県営経営体育成基盤整備事業（潟４期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書』　燕市教育委員会

与板小学校百年史編集委員会

1973　『与板小学校百年史』

報告書抄録

ふりがな	れいわごねんどながおかしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	令和５年度長岡市内遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	丸山一昭・加藤由美子・山賀和也
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	〒940－0084　新潟県長岡市幸町２丁目１番１号
発行年月日	2024年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
ころびどういせき 転堂遺跡	にいがたけんながおかしかみのぞきまちこう 新潟県長岡市上除町甲1961番地他	152021	15	374516 1387811	20231017 20231018	49㎡	確認調査
ながおかじょうあと 長岡城跡	にいがたけんながおかしじょうないちょう 新潟県長岡市城内町３丁目8-8他	152021	146	374504 1388542	20231220 20231221	54㎡	確認調査
せったややかたあと 摂田屋館跡	にいがたけんながおかしせったや 新潟県長岡市摂田屋二丁目1991番２他	152021	135	374125 1388430	20220420 20220421	６㎡	確認調査

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ころびどういせき 転堂遺跡	遺物包含地	縄文時代中期	土坑	縄文土器	なし
ながおかじょうあと 長岡城跡	城館跡	中世・江戸	なし	なし	なし
せったややかたあと 摂田屋館跡	城館跡	室町～ 安土桃山	なし	なし	なし

令和５年度　長岡市内遺跡発掘調査報告書

令和６（2024）年３月 25 日　印刷

令和６（2024）年３月 25 日　発行

発　行　　新潟県長岡市教育委員会

印　刷　　あかつき印刷株式会社